読めないのには訳がある

⇒異体字を知らないから

○くずし字：くずし書きにした文字（人それぞれ）

○変体仮名（異体字）：かつては1音節に種々の字体あり

平仮名	片仮名	平仮名	片仮名
あいうえお	アイウエオ	らりるれろ	ラリルレロ
かきくけこ	カキクケコ	わゐうゑを	ワヰウヱヲ
さしすせそ	サシスセソ	ん	ン
たちつてと	タチツテト	がぎぐげご	ガギグゲゴ
なにぬねの	ナニヌネノ	ざじずぜぞ	ザジズゼゾ
はひふへほ	ハヒフヘホ	だぢづでど	ダヂヅデド
まみむめも	マミムメモ	ばびぶべぼ	バビブベボ
やいゆえよ	ヤイユエヨ	ぱぴぷぺぽ	パピプペポ

小學校令施行規則

（しょうがっこうれいしこうきそく）

•法令番号： 明治33年文部省令第14号

•公布： **1900年（明治33年）8月21日**

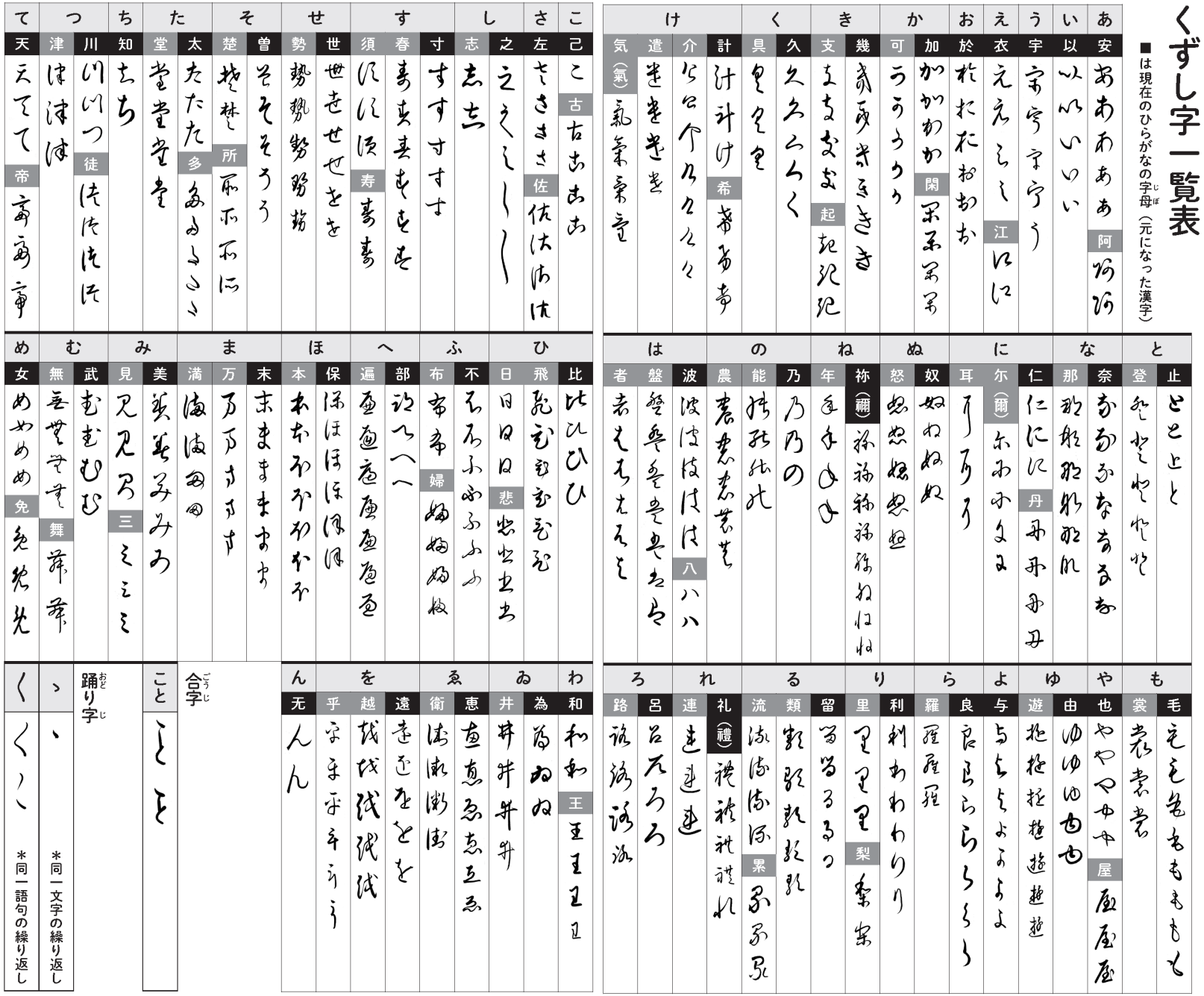
音と文字の対応関係

１対多⇒１対１へ

NIJL/EAJRS Kuzushiji WORKSHOP

くずし字一覧表

■は現在のひらがなの字母（元になった漢字）



文学通信の
サイトより

DLサイト

くずし字を読むには

○異体字を知ること・慣れる

○旧漢字のくずし字の可能性も留意すること

○意味を考えつつ、字を読むこと（知らないことばの可能性を想定する）切れ目が難

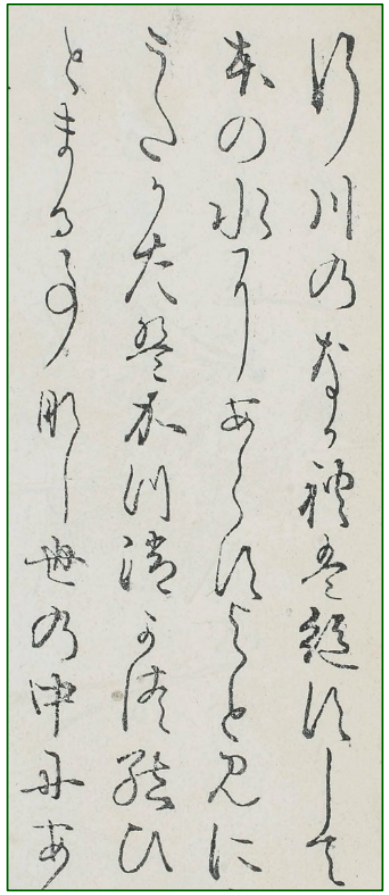
○素材の特徴を考えること

版本／写本　韻文／散文

流通するもの／仲間内

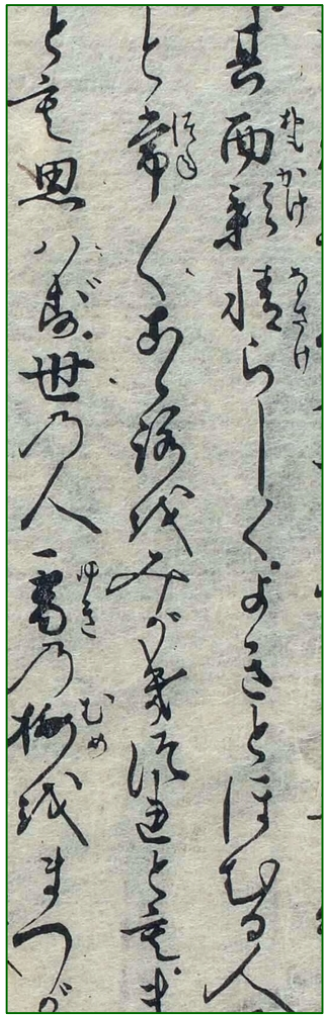
○会話は要注意！

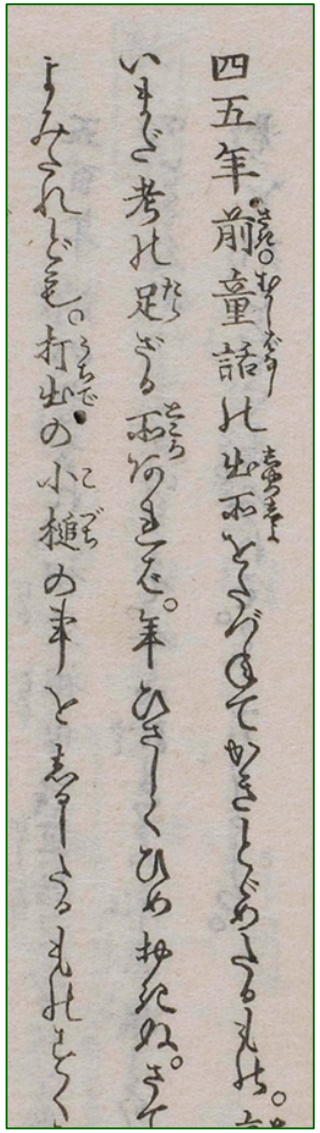
江戸板（印刷）字体いろいろ　書写体から可読優先へ



嵯峨本
方丈記

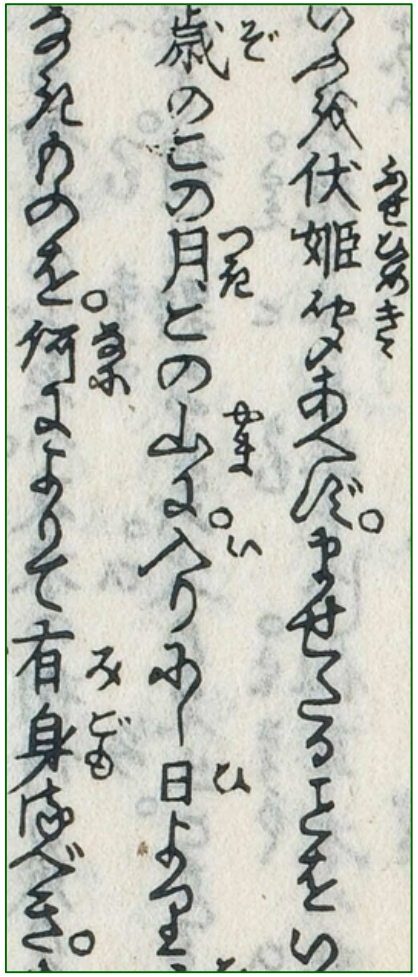
好色
一代男

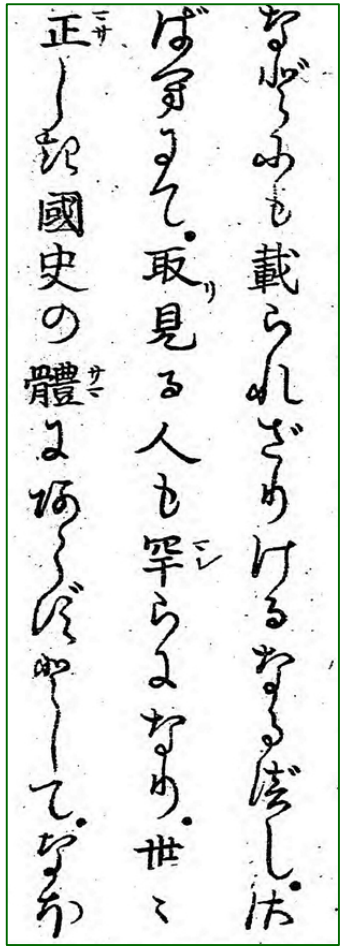




骨董集

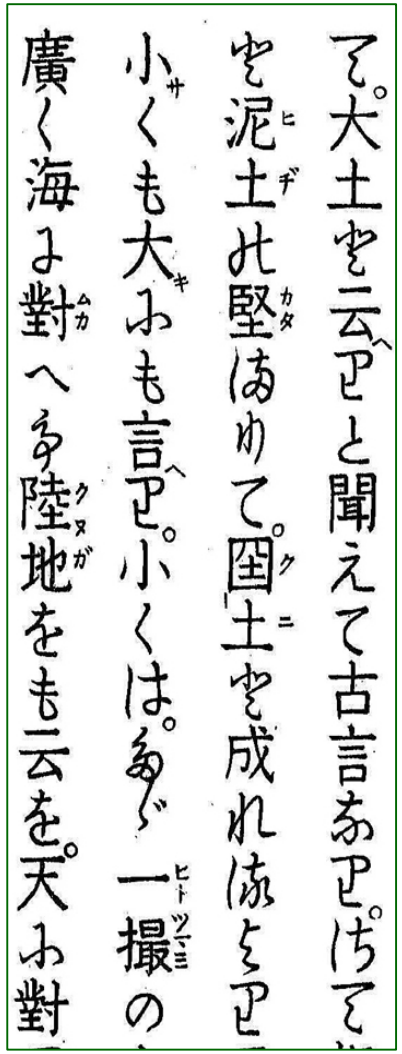
八犬伝



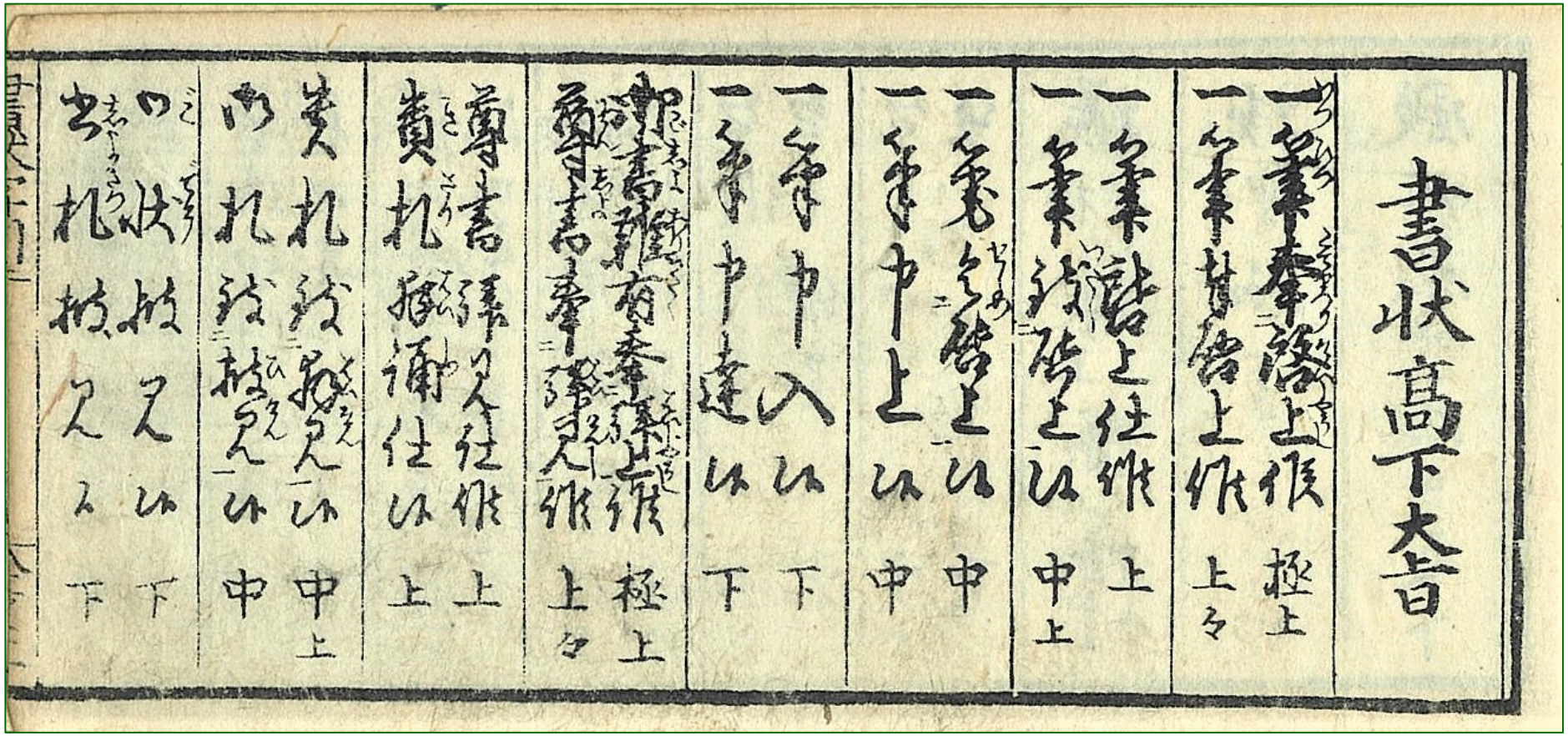


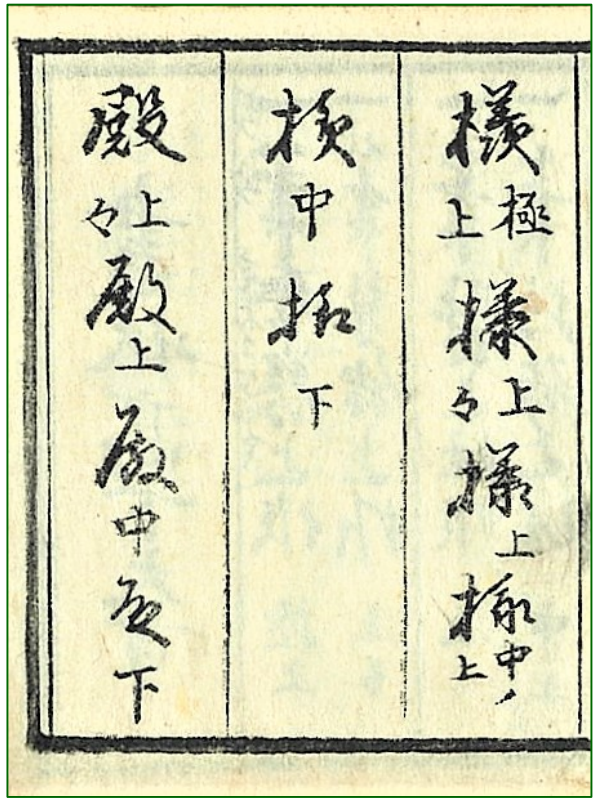
宣長
古事記伝

篤胤
古史伝



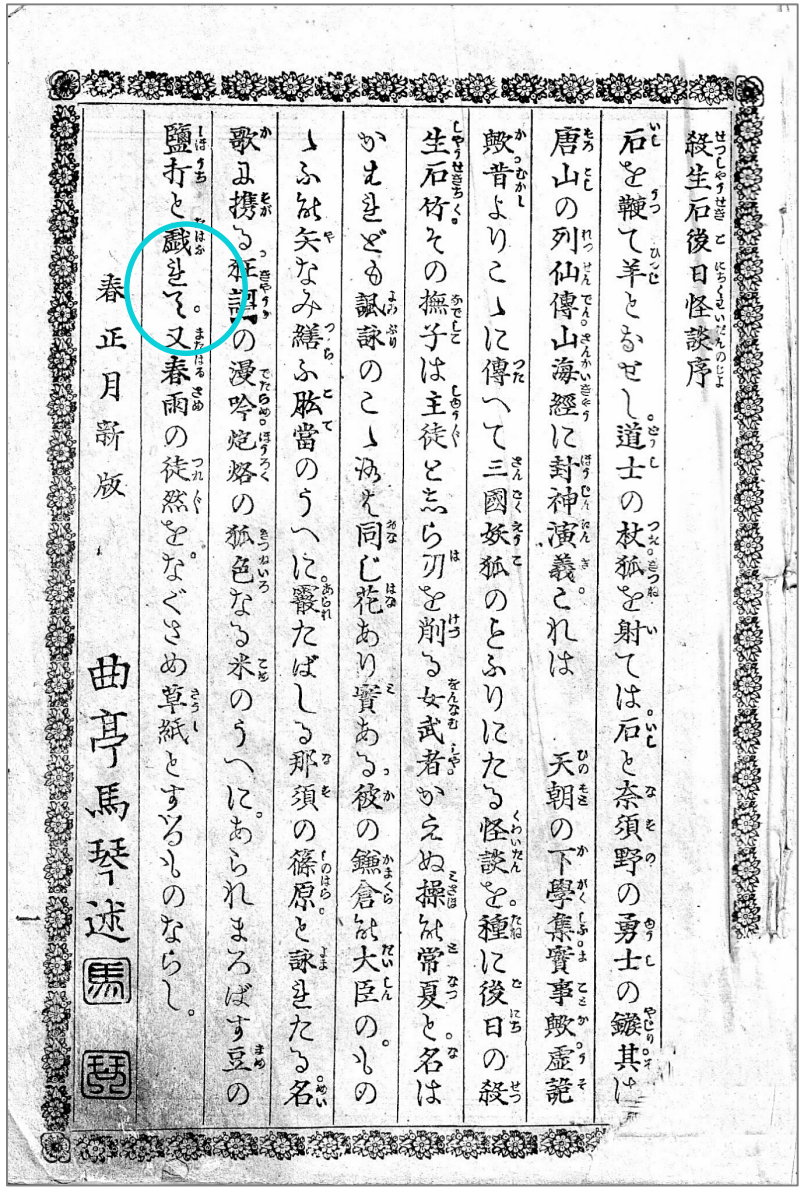
文字にもランクがある「書状文字自在引」





NIJL/EAJRS Kuzushiji WORKSHOP

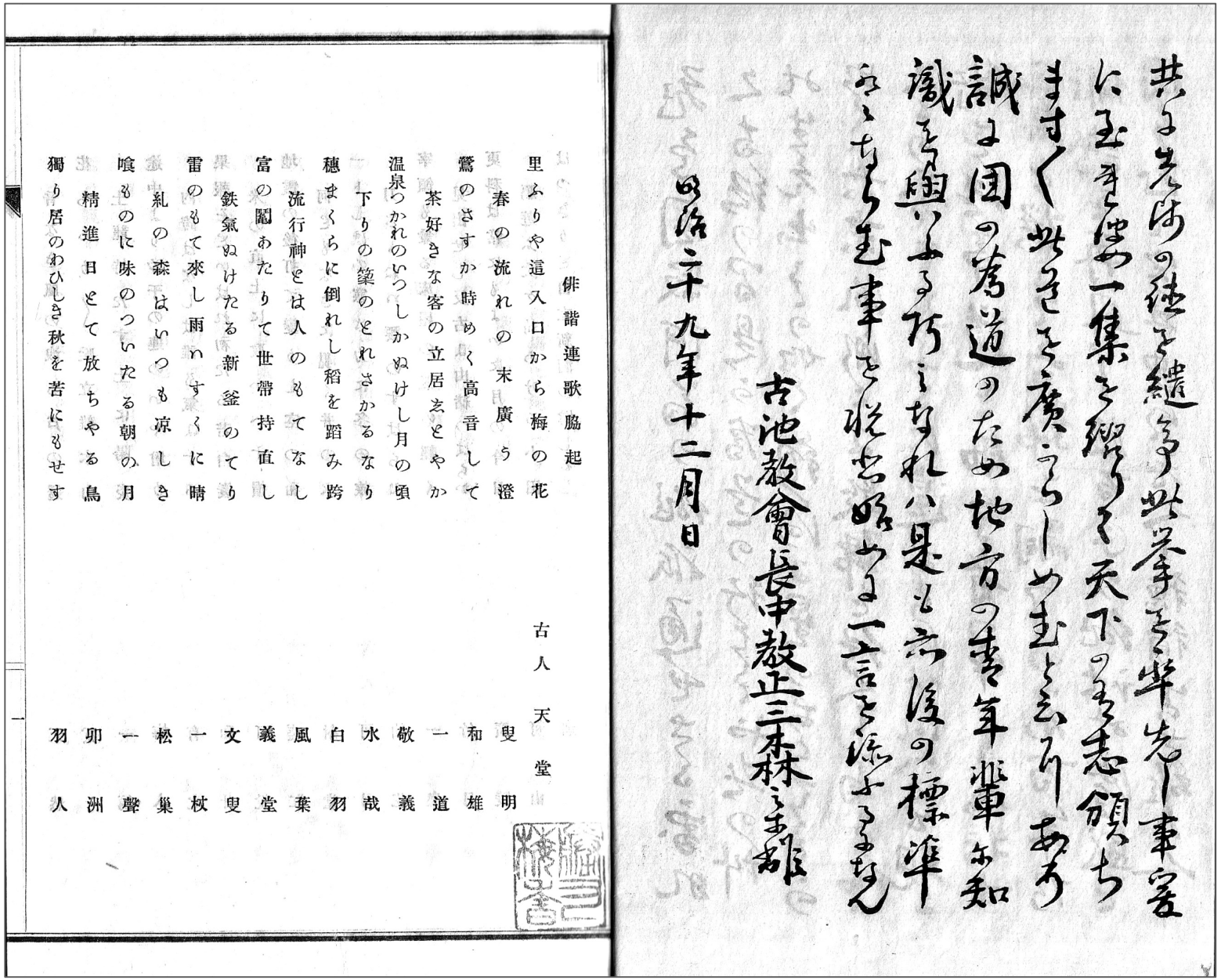
書写体は「格」／字体は「格」　序文は注意



殺生石後日怪談序

石を鞭て羊となせし道士の杖狐を射ては石と奈須野の勇士の鏃其ハ唐山の列仙傳山海經に封神演義とれは　天朝の下學集實事歟虚詭歟昔よりこゝに傳へて三國妖狐のとふりにたる怪談を種に後日の殺生石竹その撫子は主徒とゝら刃を削る女武者かえぬ操就常夏と名はかは生ども諷詠のこゝゝ為を同じ花あり實ある彼の鎌倉就大臣のものふ就矢なみ繕ふ肱當のうへに霰たばしる那須の篠原と詠ぜたる名歌ゑ携る狂詩の漫吟炮烙の狐色なる米のうへにあられまろばす豆の鹽汁と戯ぜて。又春雨の徒然をなぐさめ草紙とするものならし。

春正月新版　曲亭馬琴述



共に先師の徒を繼て此巻を半先に事寫に至て一集を編て天下の志領ちまゝく此きを廣ゝらしめ玉ふ所あり誠に国の為道のため地方の書年輩知識を興ふる所ゝなれハ是を六後の標準ゝ玉事を拙き略ゝ一言を添ふるもの

時に文化二十九年十二月日

古池教會長中教正三森幹雄

俳諧連歌脇起

里ふりや這入口から梅の花　古人天堂

春の流れの末廣う澄　叟明

鶯のさすか時めく高音して　和雄

茶好きな客の立居ゑとやか　一道

温泉つかれのいつしかぬけし月の頃　敬義

下りの筵のとれさかるなり　水哉

穂まくらに倒れし稲を蹈み跨　白羽

流行神とは人のもてなし　風葉

富の闘あたりて世帯持直し　義堂

鉄氣ぬけたる新釜のてり　文叟

雷のもて來し雨いすくに晴　一杖

糺の森はいつも涼しき　松巣

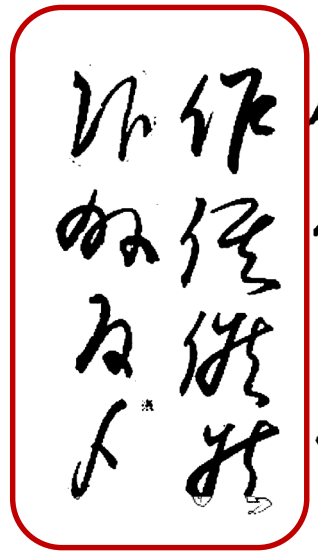
喰るものに味のついたる朝の月　一聲

精進日とて放ちやる鳥　卯洲

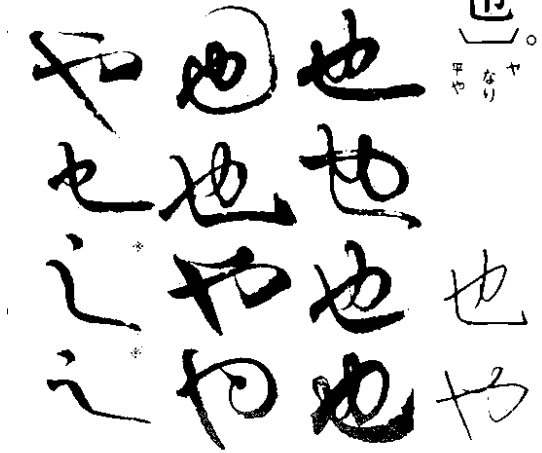
獨り居のわひしき秋を苦にもせす　羽人

覚えておくと宜いくずし字

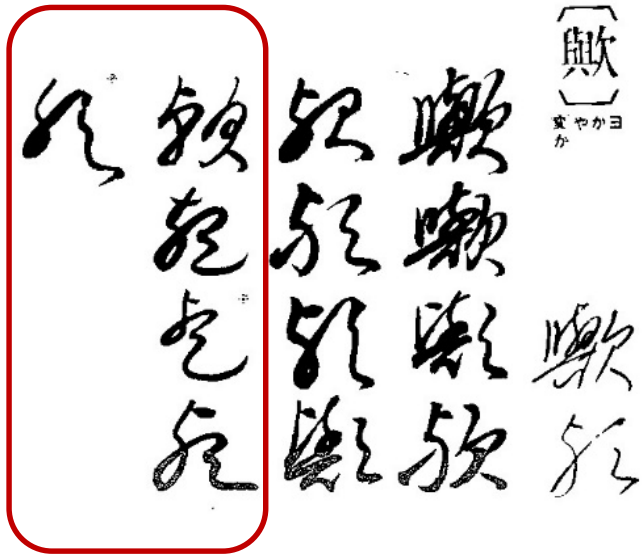
159【候】コウ（うかがう）（そうろう）



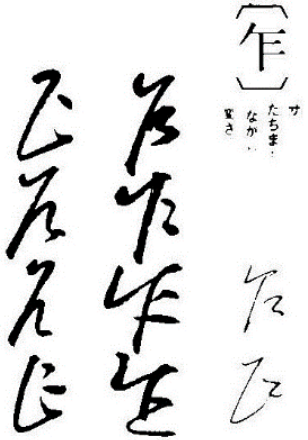
39【也】ヤ（平や）（なり）



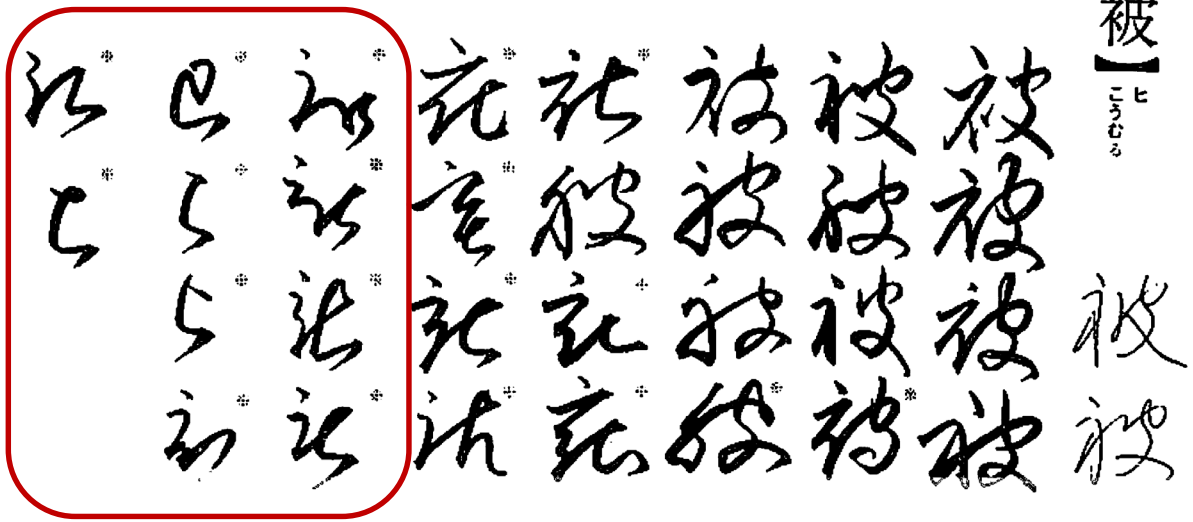
1901【歟】カヨ（疑か）



32【乍】サ（たちまち）（なが）（賞さ）



5092【被】ヒ（こうむる）

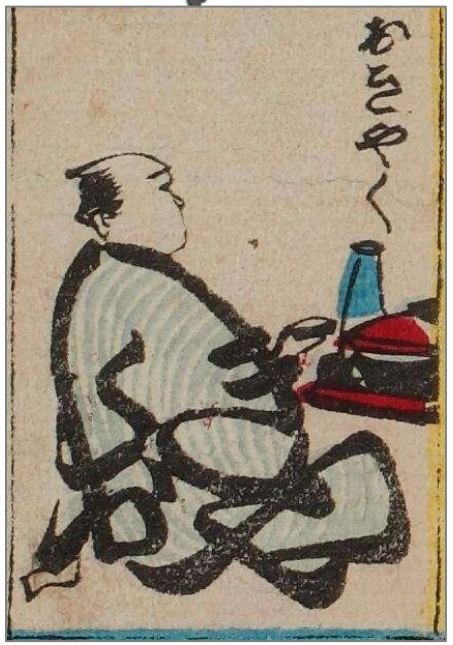


木版印刷の時代などは、字は「おもちゃ」だった

11　猫の当字（かつを）
大判　一勇斎国芳　天保十四年―
弘化四年（一八四三―一八四七）
頃　伊場屋仙三郎版

猫の当字（かつを）

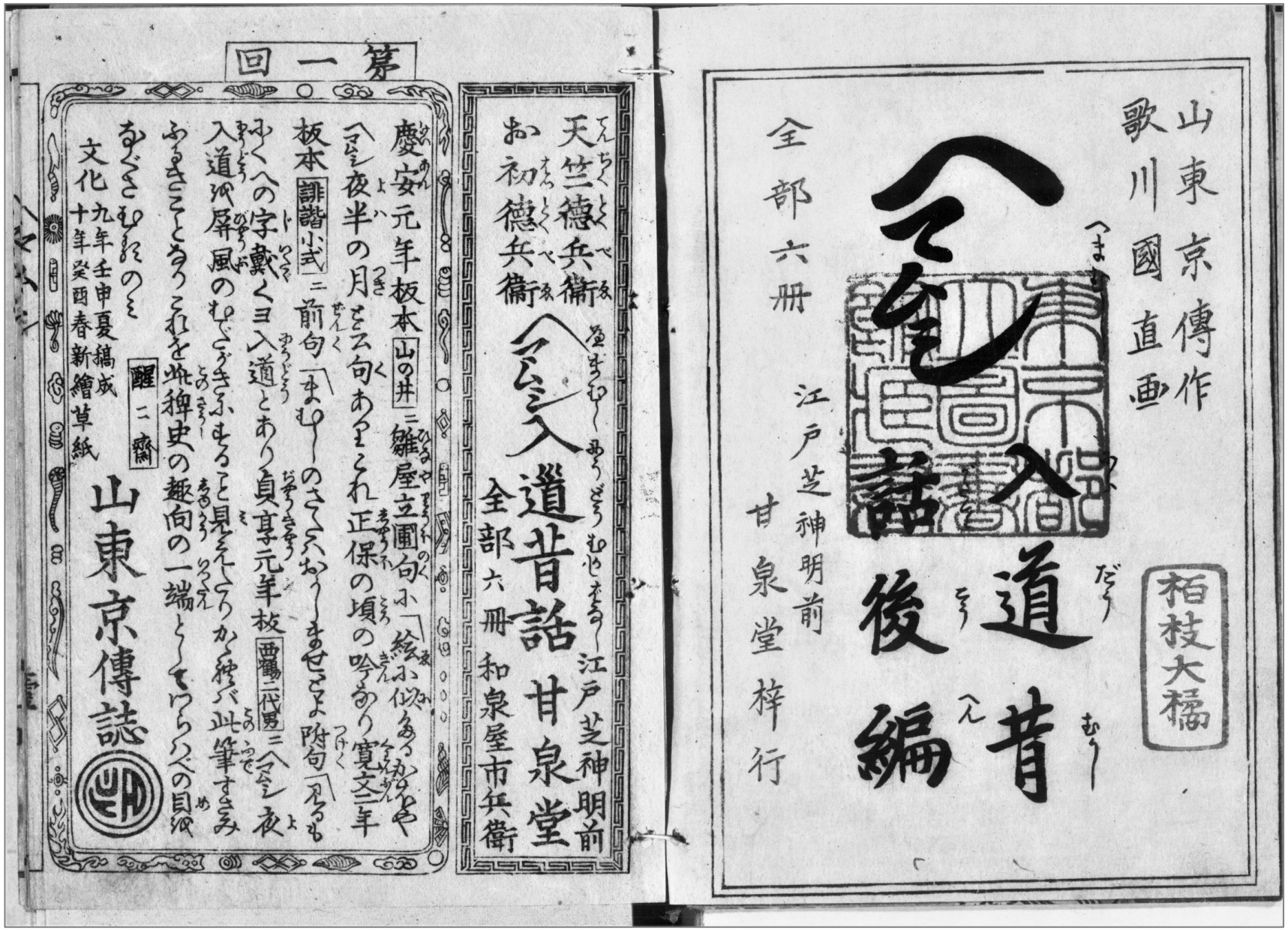
鷺（さぎ）



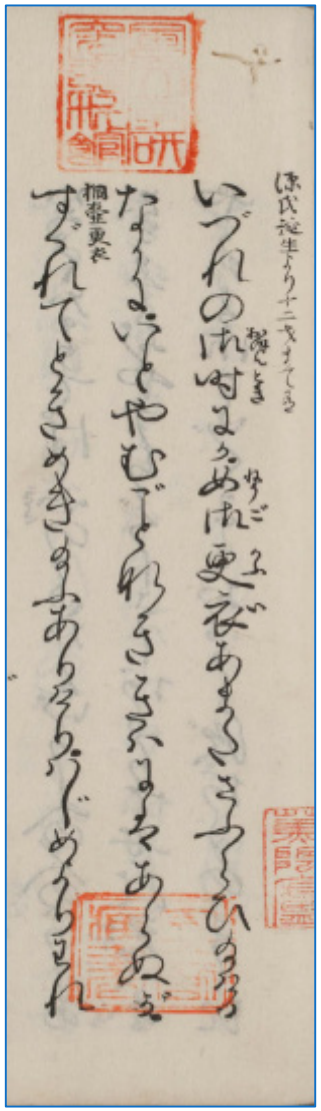
文字が背景

鬼児島名誉仇討

文字で遊ぶ


山東京傳作
歌川國直画
全部六冊
江戸芝神明前
甘泉堂梓行
道昔話後編
柏枝大福
天竺徳兵衛
お初徳兵衛
道昔話
甘泉堂
全部六冊
和泉屋市兵衛
江戸芝神明前
寿一回
慶安元年板本
山の井
雛屋立圃句
夜半の月
正保の頃の吟
寛文二年
板本
俳諧小式
前句
のさくらかな
附句
見るも
への字
入道
貞享元年板
西鶴二代男
夜
入道
屏風
此筆
醒二齋
文化九年壬申夏稿成
十年癸酉春新繪草紙
山東京傳誌

くずし字を読むだけでいいのか（理解の過程）



翻字（中間データ）

いづれの御時にか。女御更衣あまたさふらひ給けるなかに。いとやむごとなききはにはあらぬが。すぐれてときめき給ふありけり。はじめよりわれ

釈文　他本との校合など（本文校訂）

いづれの御時にか。女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。はじめより「われ

正しいとは限らないという見識

現代文

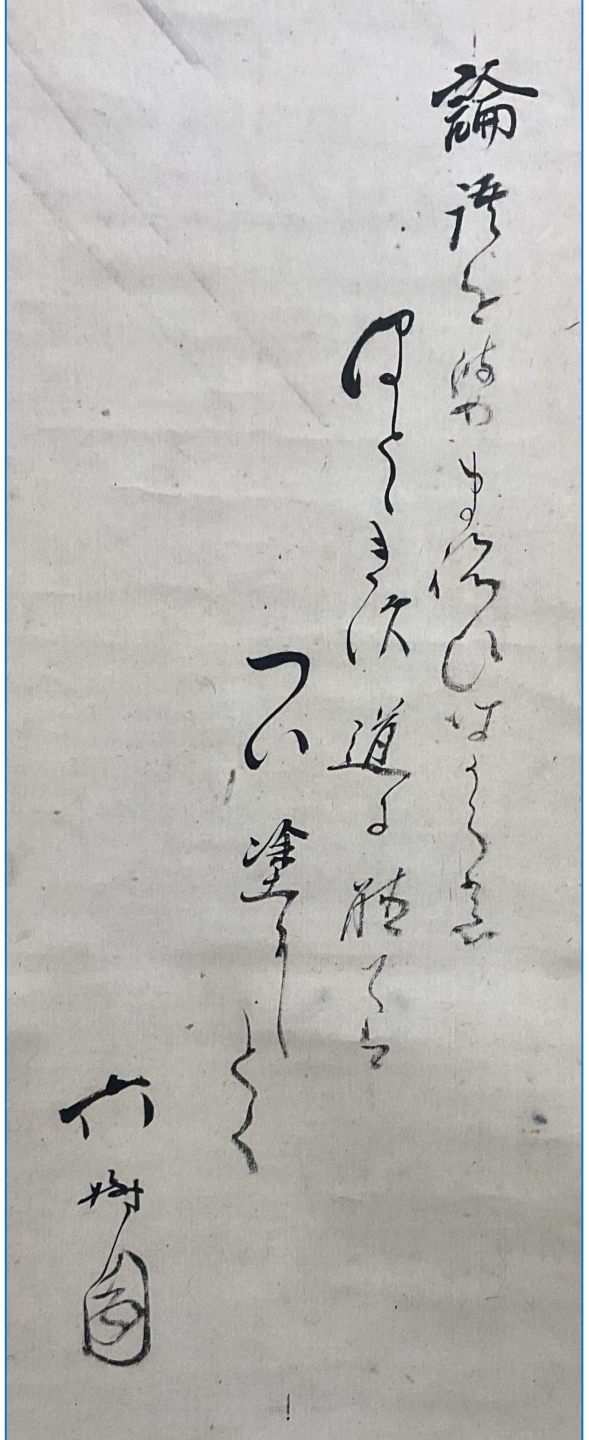
いつの時代のことであったか、（帝にお仕えする）女御や更衣が多くいらっしゃったなかで、大層高貴な身分の出身ではないが、殊の外、帝の寵愛を受けていらっしゃる人がいらっしゃった。はじめから「自分が…

翻字（特に版本）＝AIの時代は近い

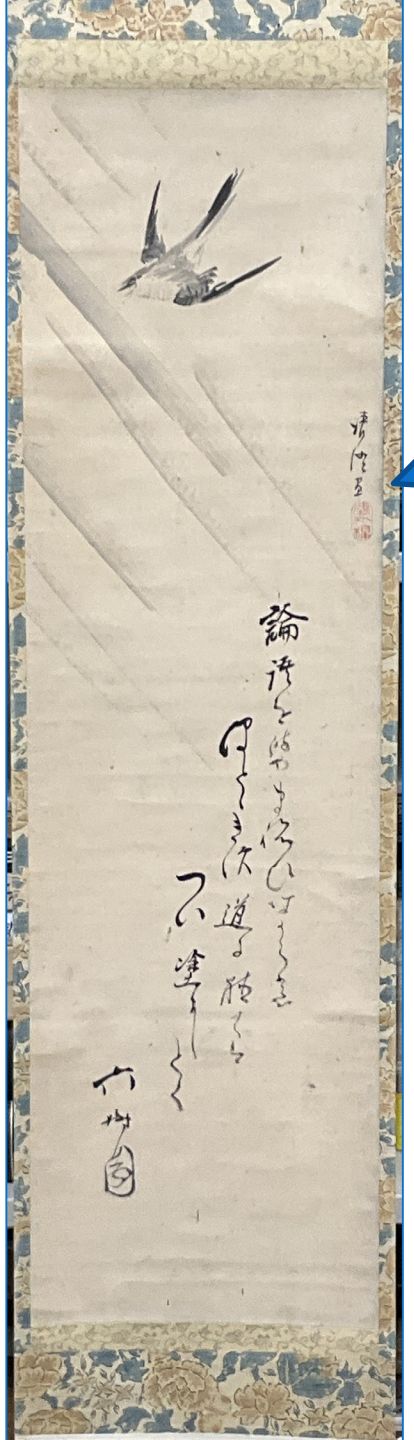
みを

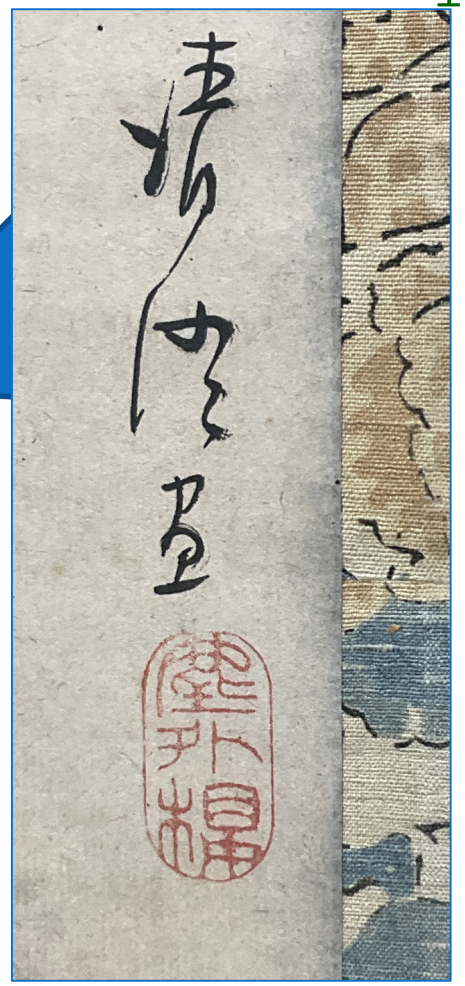
ふみのは
（海外可能？）

第１講：導入



課題





第１講：導入

課題

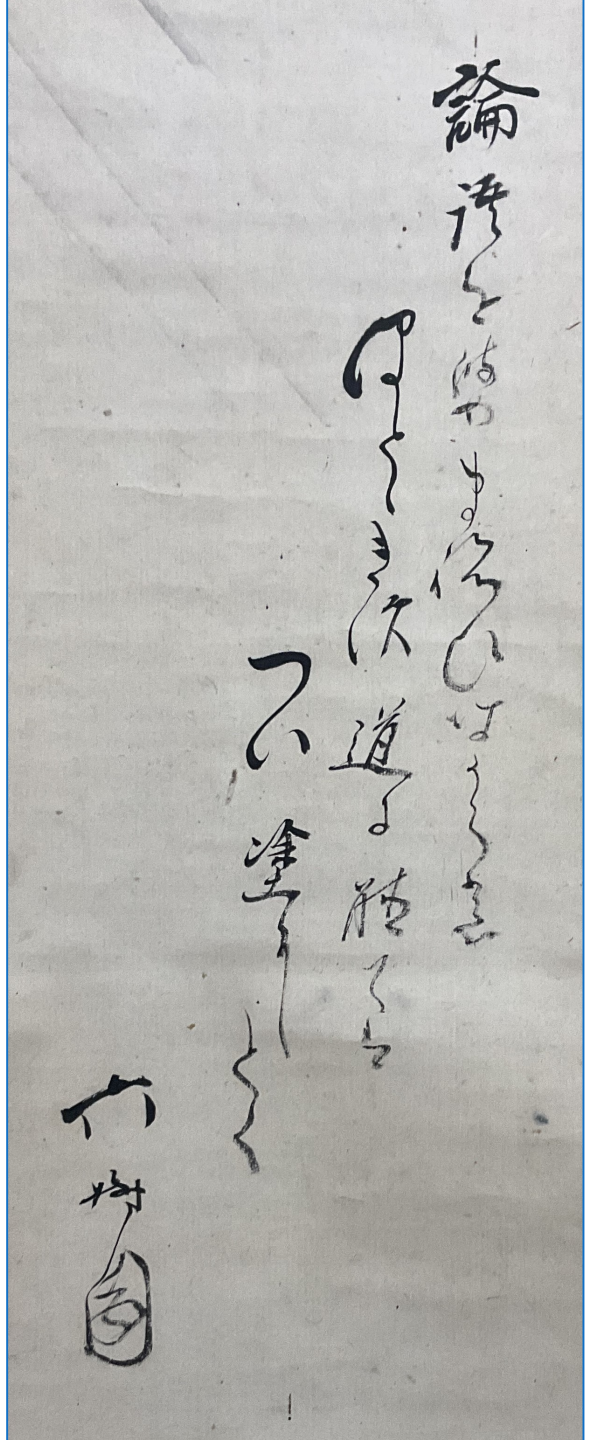
『論語』陽貨篇「道に聴きて道に説くは、徳をこれ捨つるなり」の意味・解釈

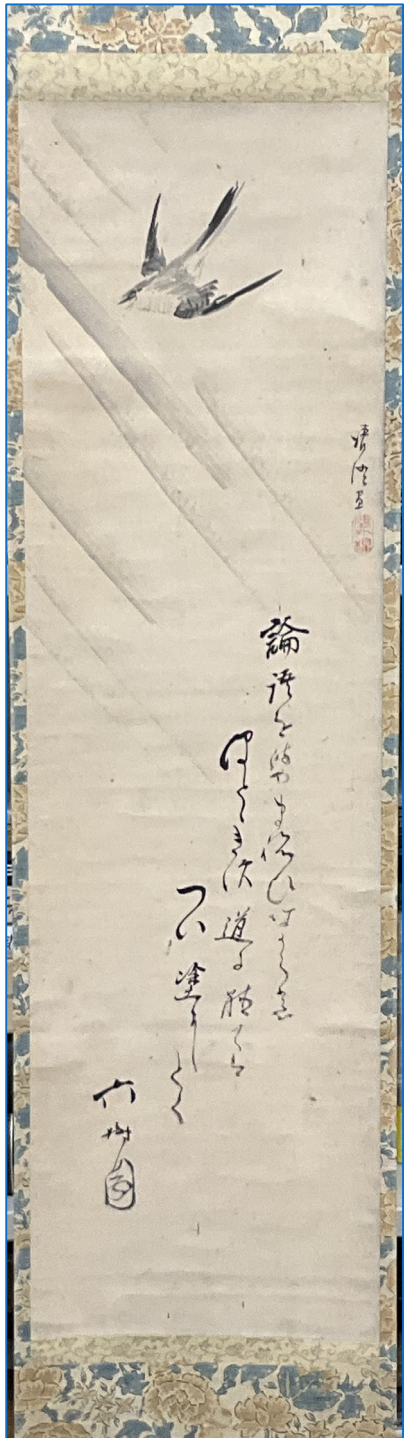
原文「子曰、道聴而塗説、徳之棄也。」

書き下し文「子曰く、道に聴きて塗（みち）に説くは、徳を之れ棄つるなり」。

通釈「孔子言う、今、行く道の途中で善言をきいても、すぐ行き先の路上で、逢う人に話して、そのまま忘れてしまっては、心に養うこともなく、身にもつかず、これは全くみずから徳を棄てるというものだ」。熟語「道聴塗説」の出典。

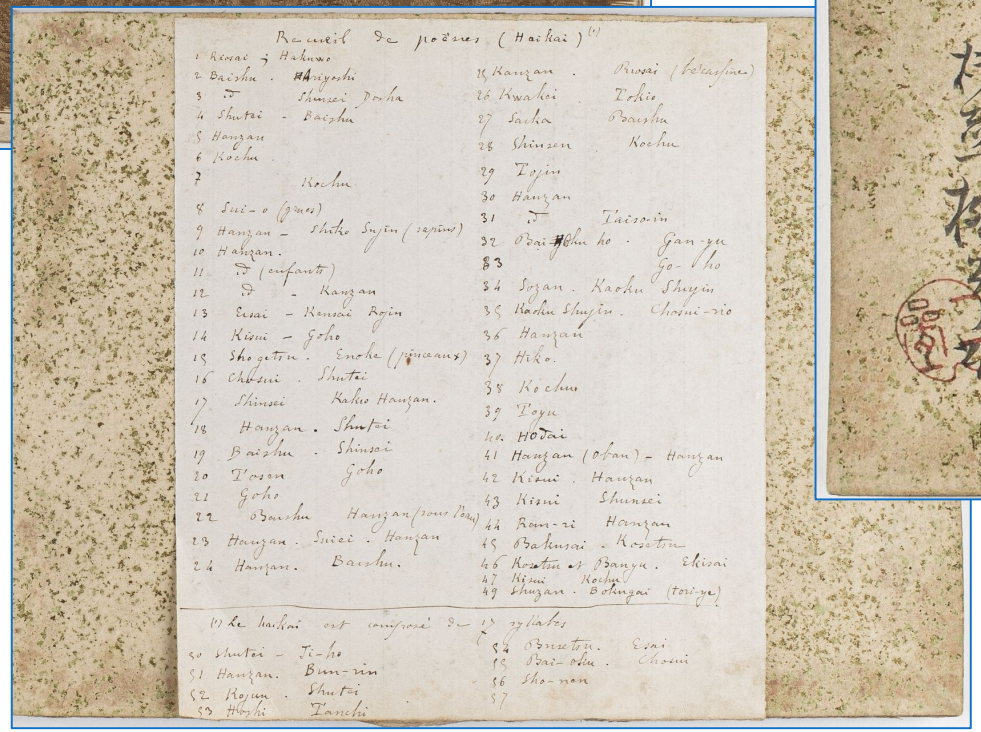
論語をばまなびながらも
ほとゝぎす道に聴ては
つい塗にとく





ストラスブール装飾美術館所蔵俳諧一枚摺貼り交ぜ帖より

表紙



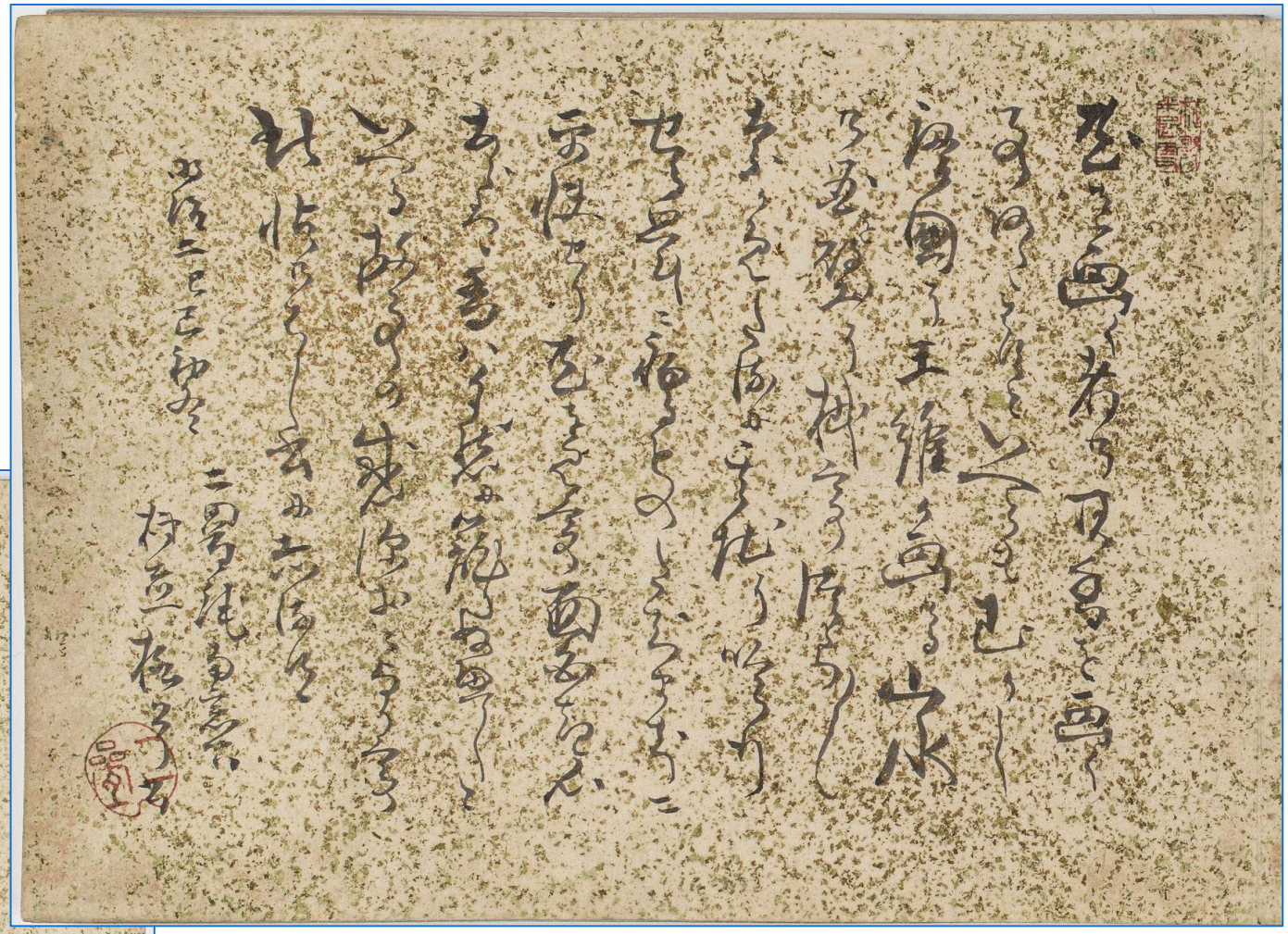
Recueil de poésies (Haikai) (1)

1 Reisai ? Hakuwo
2 Baishu . Hariyoshi
3 〃 Shinsei Dosha
4 Shutai - Baishu
5 Hanzan
6 Kochu
7 Kochu
8 Sui-o (grues)
9 Hanzan - Shiko Sujin (sapins)
10 Hanzan.
11 〃 (enfants)
12 〃 - Kanzan
13 Ensai - Rensai Rojin
14 Kisui - Goho
15 Shogetsu . Enoko (pinceaux)
16 Chosui . Shutei
17 Shinsei Kaho Hanzan.
18 Hanzan . Shutei
19 Baishu . Shinsei
20 Tosen Goho
21 Goho
22 Baishu Hanzan (sous l'eau)
23 Hanzan . Suiei . Hanzan
24 Hanzan. Baishu.
25 Kanzan . Rosai (bécassine)
26 Kwakei . Tokio
27 Sacha Bousha
28 Shinsen Kochu
29 Tojin
30 Hanzan
31 〃 Tuisorin
32 Bai-Ohu ho . Gan-yu
33 Go-ho
34 Sozan . Kachu Shujin
35 Kachu Shujin . Chosui-rio
36 Hanzan
37 Hiko.
38 Kochu
39 Toyu
40 Hodai
41 Hanzan (Ofan) - Hanzan
42 Kisui . Hanzan
43 Kisui Shunsei
44 Bun-ri Hanzan
45 Bakusai . Kosetsu
46 Kosetsu et Banyu . Ekisai
47 Kisui Kochu
48 Shuzan . Bokusai (toriye)

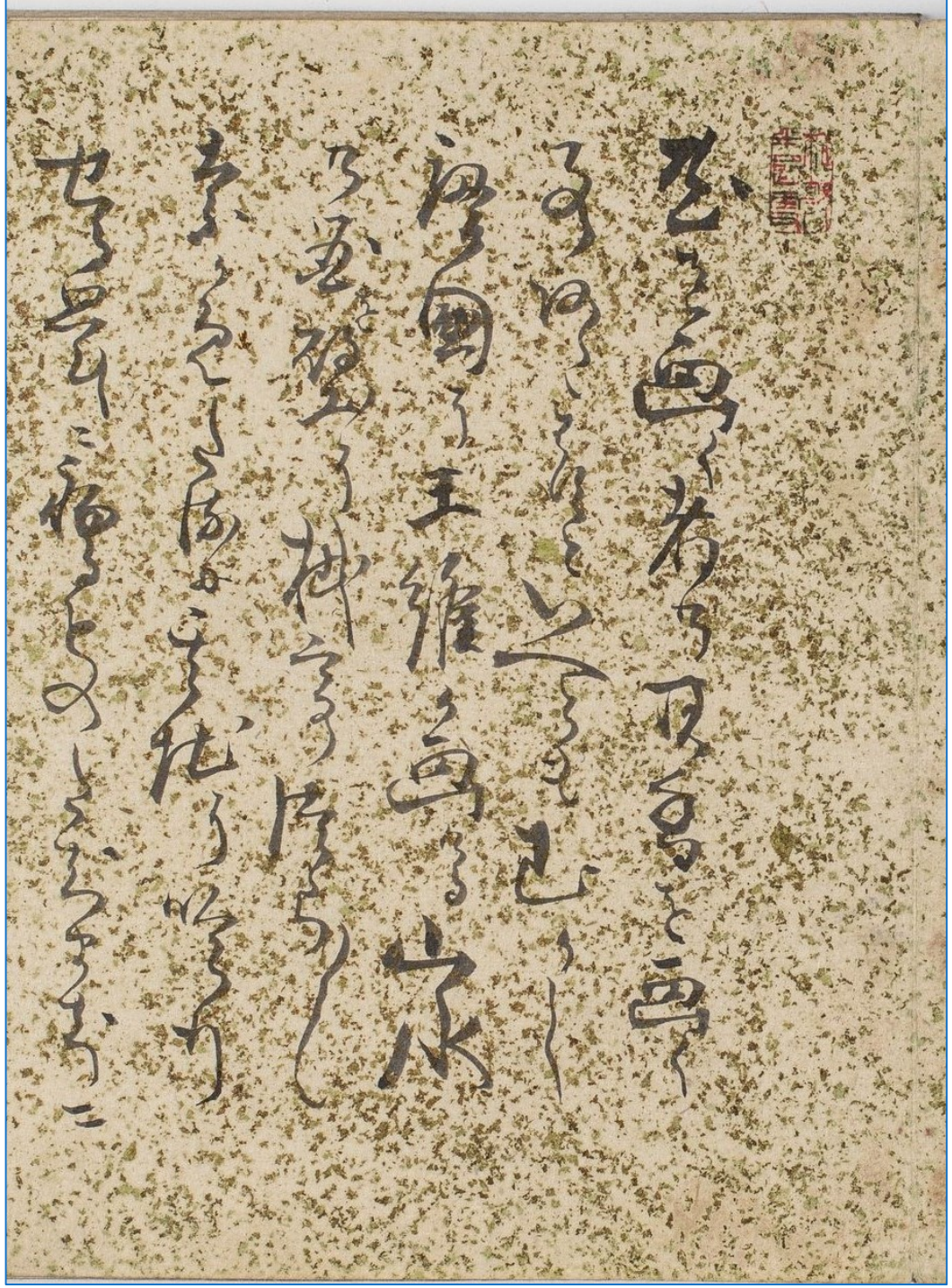
(1) Le haikai est composé de 17 syllabes

50 Shutei - Ji-ho
51 Hanzan. Bun-rin
52 Rojin . Shutei
53 Hoshi Tanchi
54 Bousetsu. Ensai
55 Bai-ohu . Chosui
56 Sho-non
57

見返し



序文



序文は大事

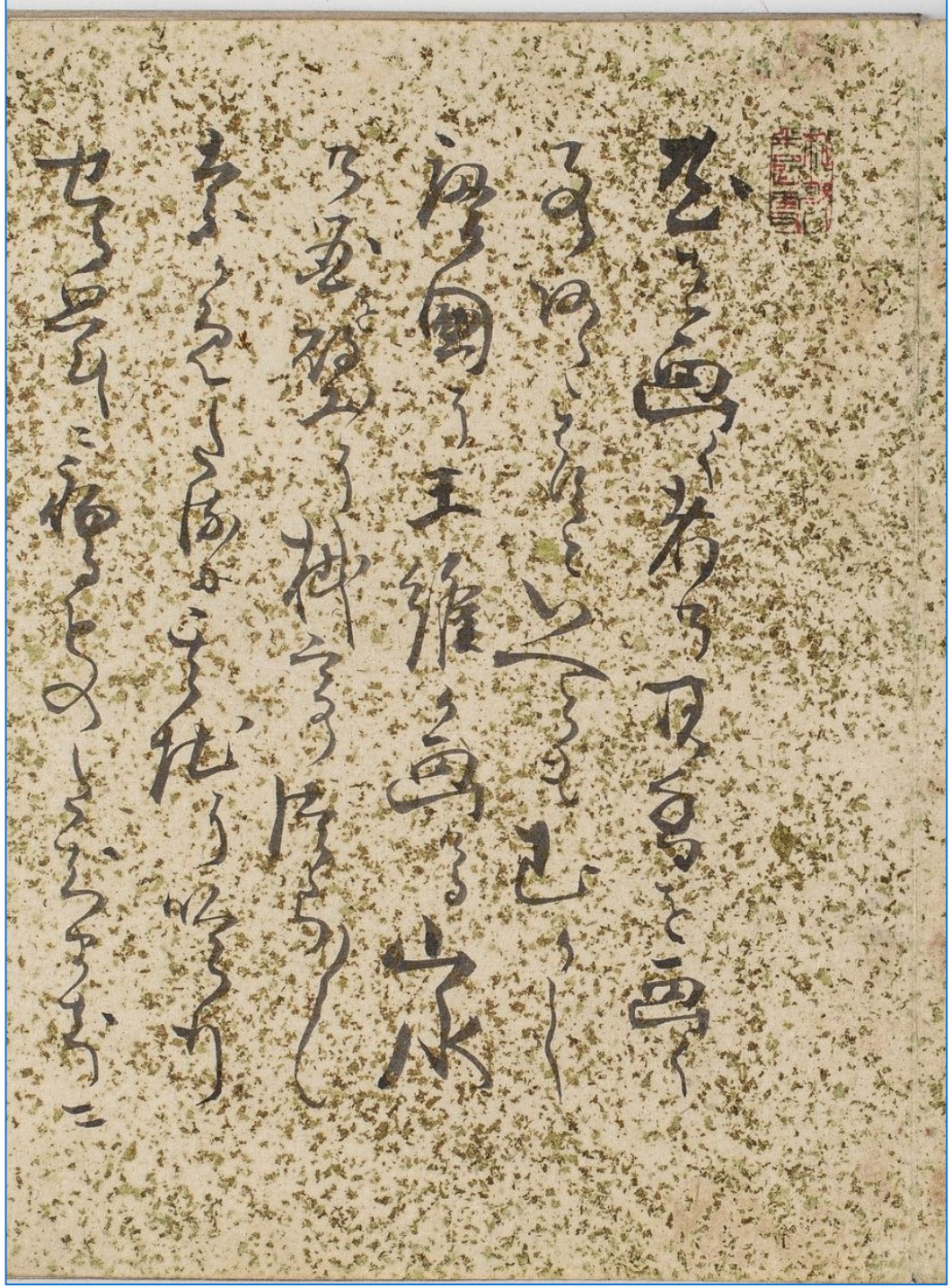
課題

判読できる
文字だけで
も判読

↓

それ以外は
ニ（ゲタ）

花を画く者の其香を画く
事あたはずといへどもむかし
唐国に王維が画ける山水
の図を壁に掛てつら／＼
ながめたるに其地に吟行
せる思ひに病るものたちまちに

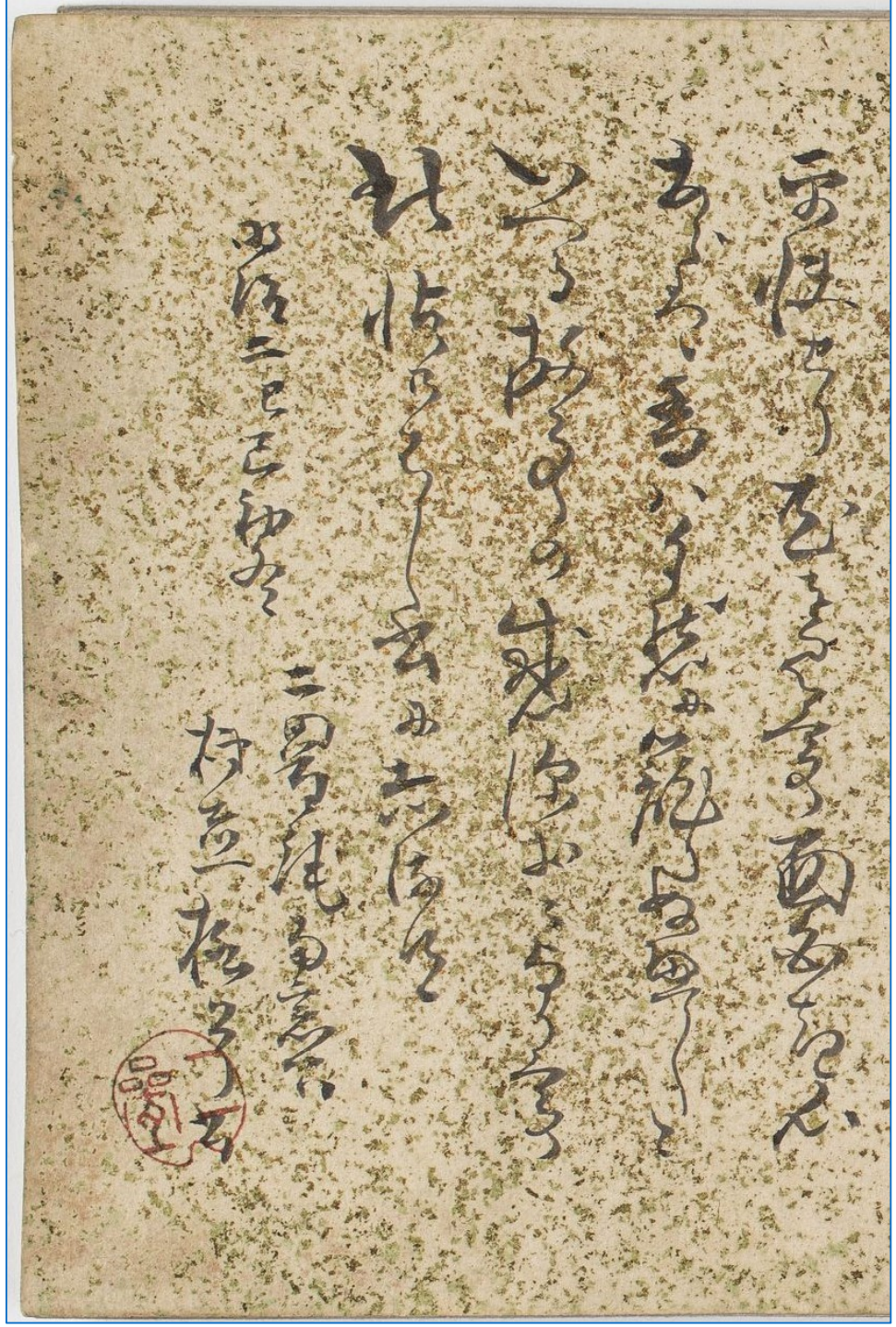


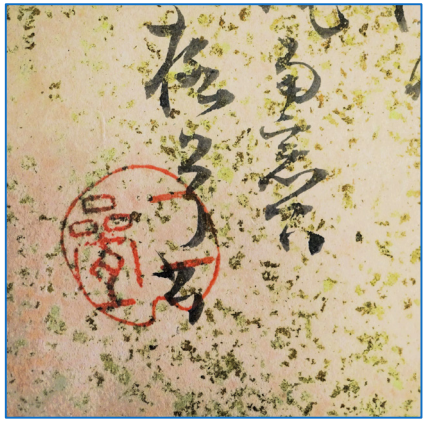
序文は大事

課題

判読できる
文字だけで
も判読
↓
それ以外は
ニ（ゲタ）

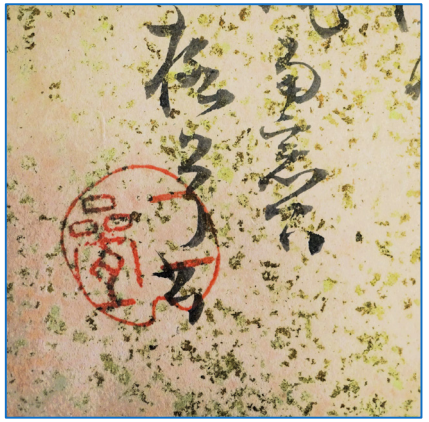
課題

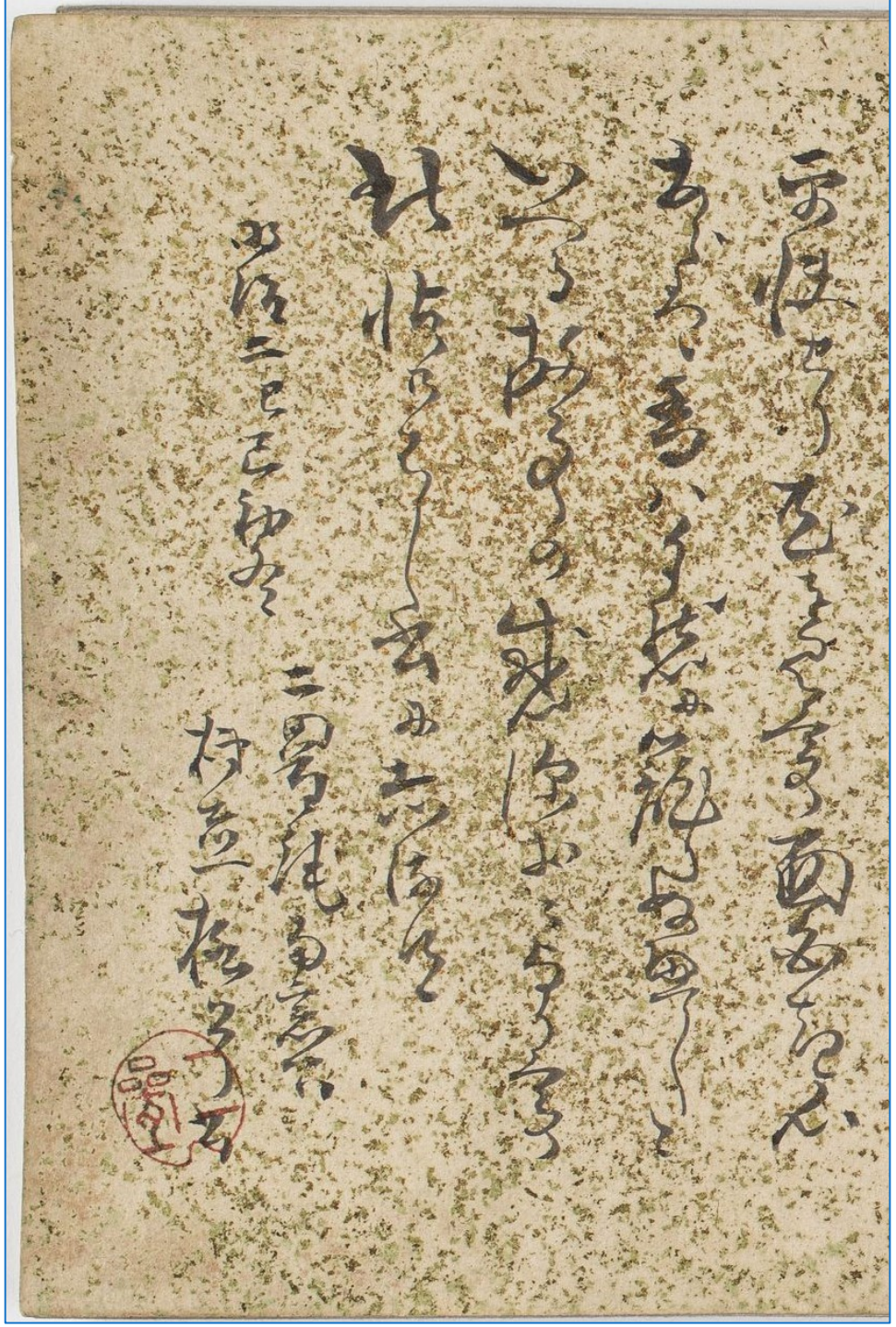




課題

平快せり花を見て面白き心
あらば香は自然に籠りぬべしと
いへる故事の惑深きによりて
此帖のはし書に誌る有
明治二巳巳初冬　二畳庵南窓下
※二畳庵桃兮　柿並桃兮書〔二畳〕
浪華俳壇の人物





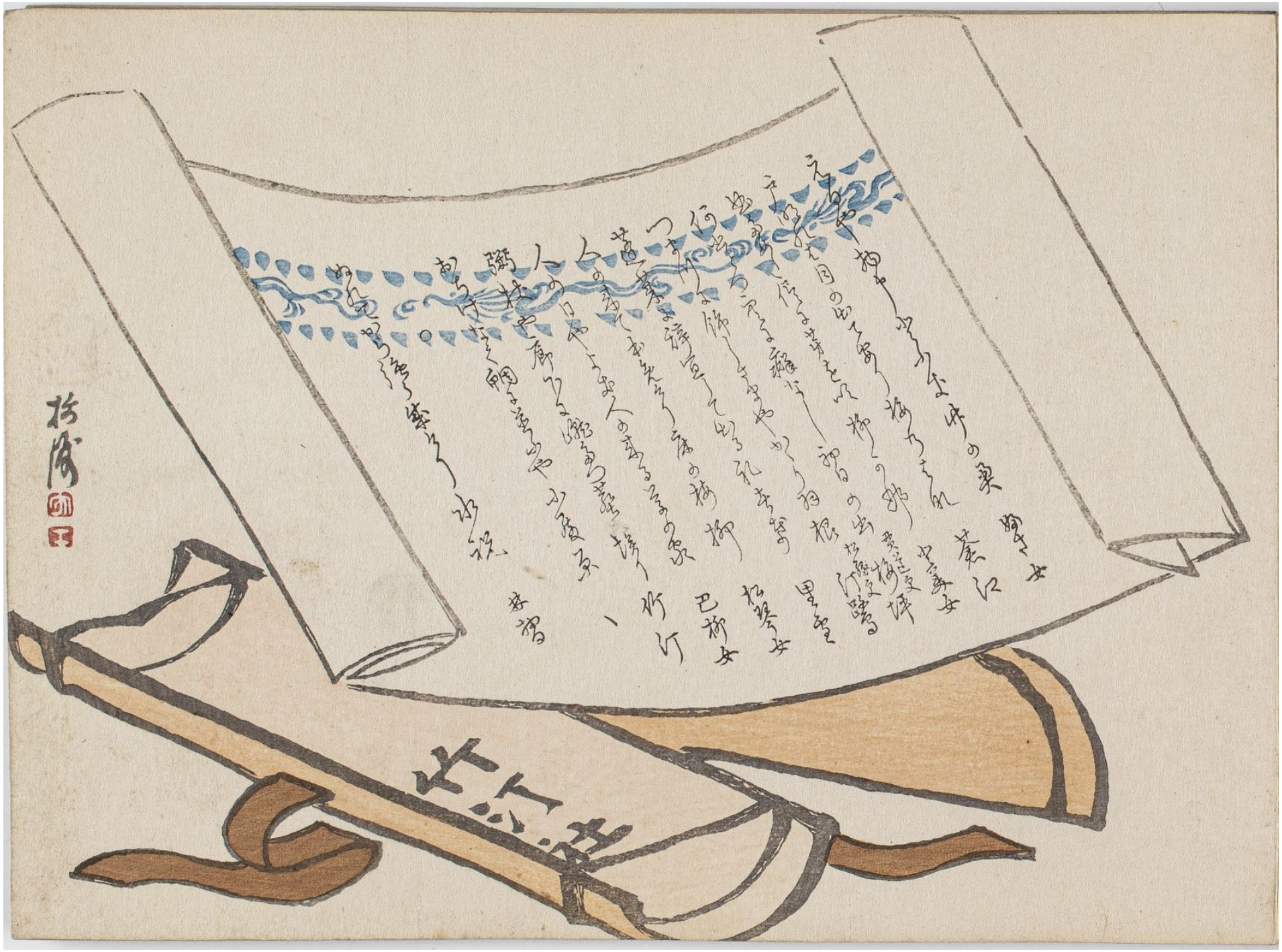
歳旦刷り物等について（雲英末雄先生『俳書の話』より）

新年の初めに祝意をこめて発表される句を歳旦吟というが、それは江戸時代の俳人の場合、歳旦帳として印刷され配られることを通例としている。そのうち宗匠を中心に主だった門弟と発句（五七五）・脇（七七）・第三（五七五）まで三組つらねるものを「歳旦三つ物」と称し、ほかに知友の歳旦や歳暮（前年の年末）の発句を集めて「引付」として三つ物に付載する。もっとも三つ物だけのものや、発句ばかり集めたものもある。体裁は美濃紙横二つ折りのもの一枚か、二～三枚までのものがほとんどだが、中には十枚以上のものもある。こうして歳旦帳は正月の配りものとされるわけだが、準備の都合などもあって、現在の年賀状の印刷などと同じように、暮れのうちに刷りあげて用意しておかれたもの、と思われる。

そうして宗匠各自が、二～三枚の歳旦三つ物を新年の配り物としたのはもちろんだが、阿誰軒（あすいけん）の俳書目録からも明らかなように、井筒屋が宗匠各派各人のものを集成して「三つ物揃」とか「大三物」などと称して売り出していた。

文化文政期から天保を経て幕末にいたる時期（一八〇二―一八六七）は、俳諧が市民生活の中に広く浸透してゆく時期で、その結果、一般大衆の中に俳諧趣味ともいうべきものが根づいた時代である。俳書もますますバラエティに富み、さまざまな趣向を盛りこんだものが多くなっている。とりわけ**歳旦帳や歳旦一枚刷りなどが盛んに行なわれ、彩色刷りでさまざまなくふうが凝らされ、見た目にも楽しいものになってゆく。**この時期には、歳旦一枚刷りがきわめて多く出されている。それも当時評判の高い画家に絵を頼み、それを彩色刷りにして、**懐紙一枚の大きさのものや、その半分、**あるいは半紙大、またはその半分、さらにそれより小さなサイズの一枚刷りまで、さまざまな大きさで出されている。絵柄も正月にちなんで宝船とか、万歳とか、鶴や、宝珠、初日の出、海老などが描かれ、新年の気分を盛りたてている。画家では香雪・交山・椿年・圭岳・来章、あるいは幕末から明治にかけて一世を風靡した柴田是真などが、得意の筆をふるっている。こうしてみると、現在の色刷りの賀状などに近い雰囲気がうかがえるが、いかがなものであろうか。歳旦一枚刷は、明治時代を経て、大正・昭和とつづき、昭和も十年代にまで及んでいる。**歳旦一枚摺**のほかに**春興一枚摺**などもあるので中の句を注意して鑑賞したい。

一枚摺いろいろ



一枚摺いろいろ

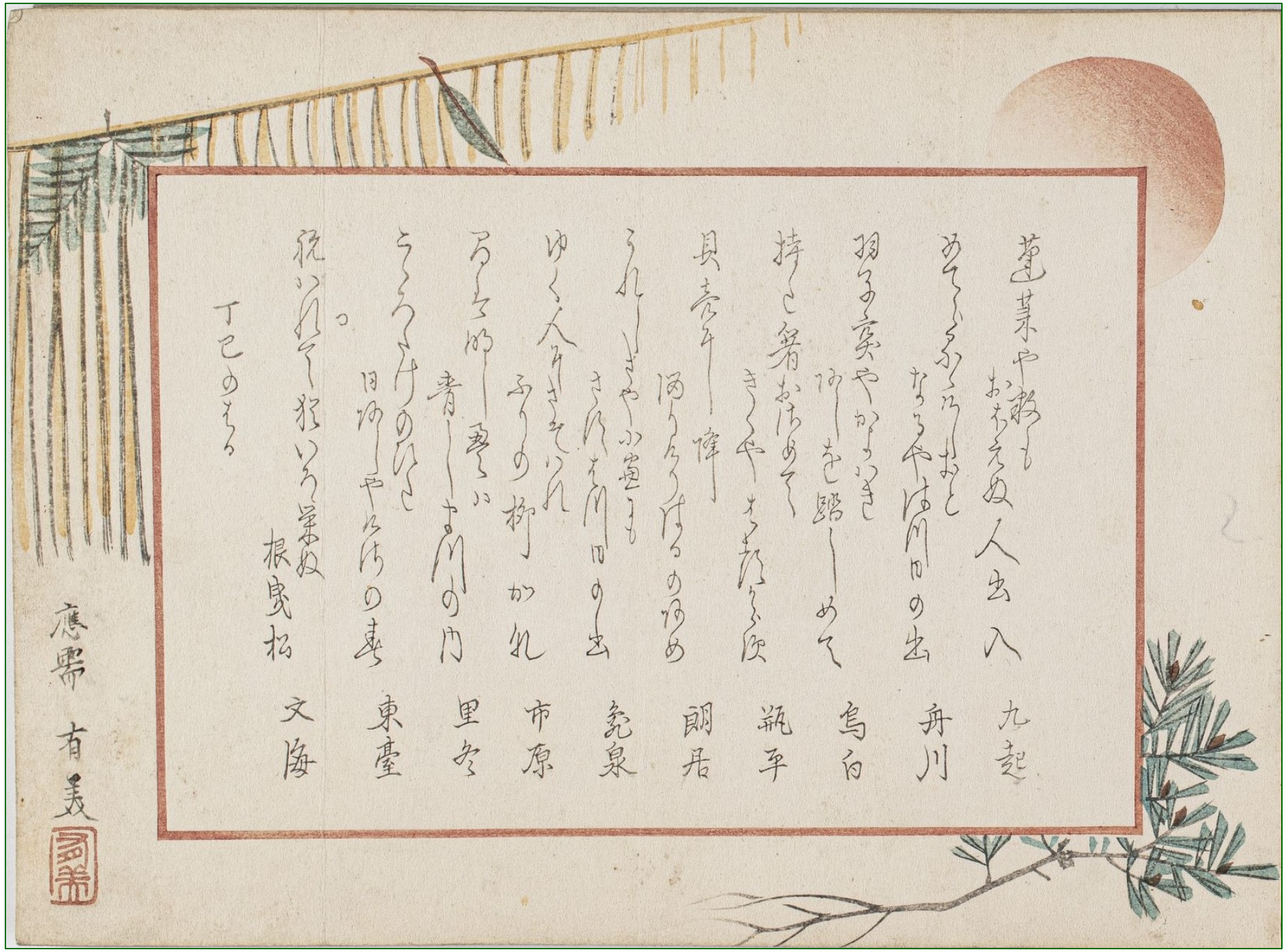
一枚摺いろいろ

一枚摺いろいろ

一枚摺いろいろ

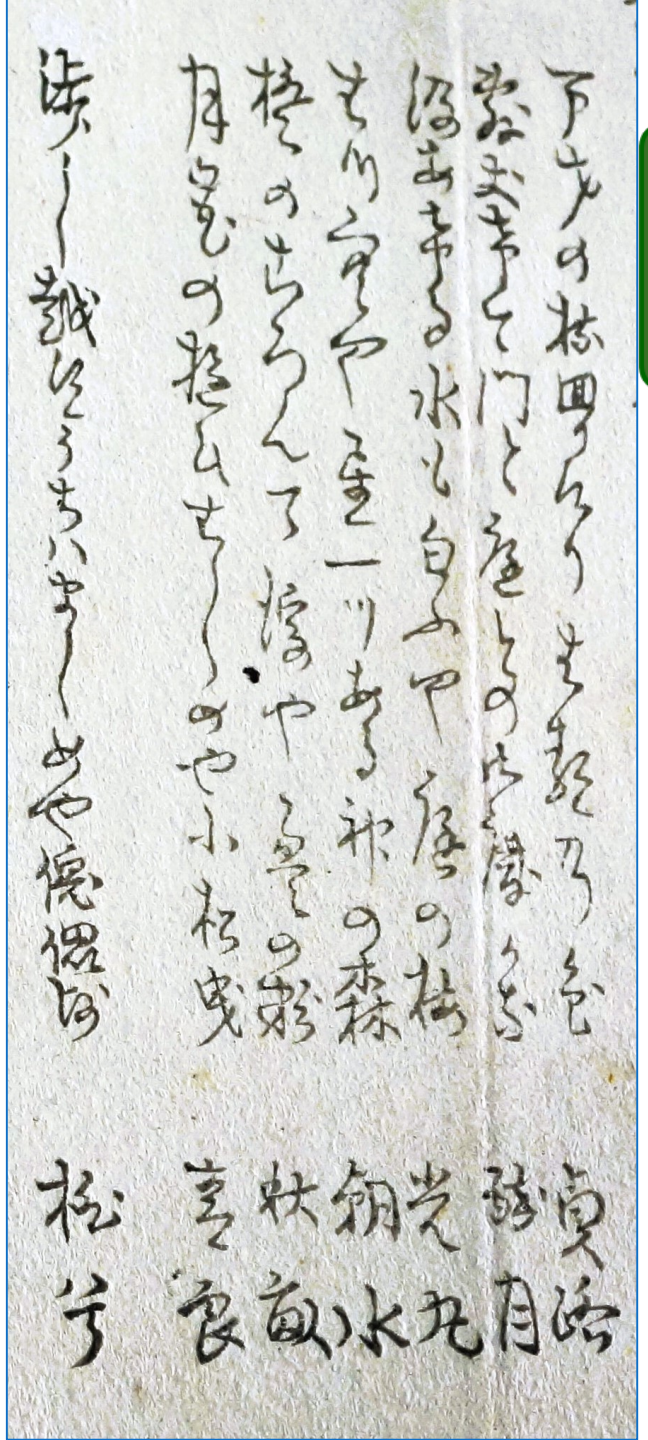
一枚摺いろいろ

一枚摺いろいろ

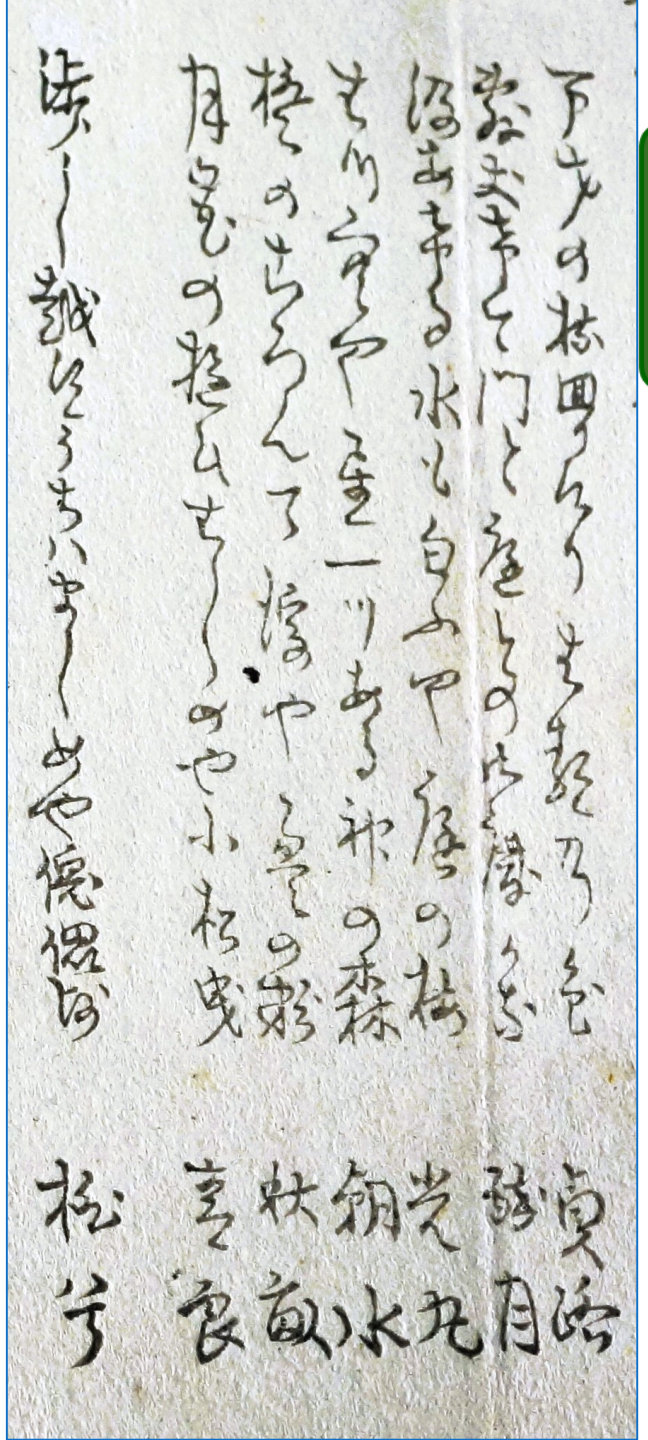

蓮葉や新もおもたる人出入　九起
めてふるふるおとなるやはつかの出　舟川
羽ふる奚やかつぎはつかを踏しめて　烏白
持と脇おもためて　瓶平
きくやさきたる欣　朗月
貝吉平　峰
ゆるるけるのゆめ
れしさやふ蛍も　瓶泉
さたさ川口の出
ゆく人ときそいれ　市原
ふるの柳かれ
ろさめ　里々
青しさ川の内
ちちけのひさ　東臺
日ゆやたの春
祝いれて狂いろ菓数　文海
根岸松
丁巳のとる
應需　有義

吹裏中国猿
自然影の大

課題



課題



万才の桟回りけりはるの色　貞路

敷だけで門と庭との御慶かな　酔月

汲あげる水も匂ふや庭の梅　光丸

はつ空や星一つなる神の森　朝水

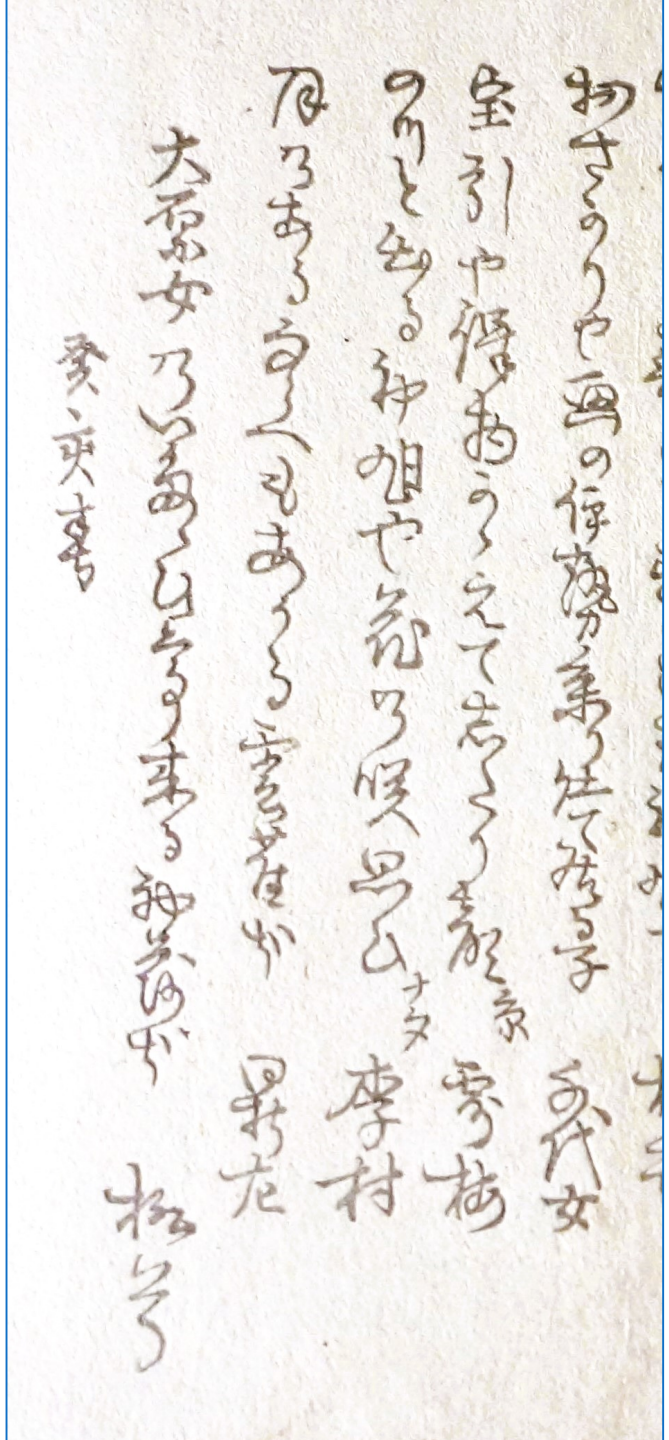
橙のころんで浮や畳の粉　秋畝

月花の遊びはじめや小松曳　青良

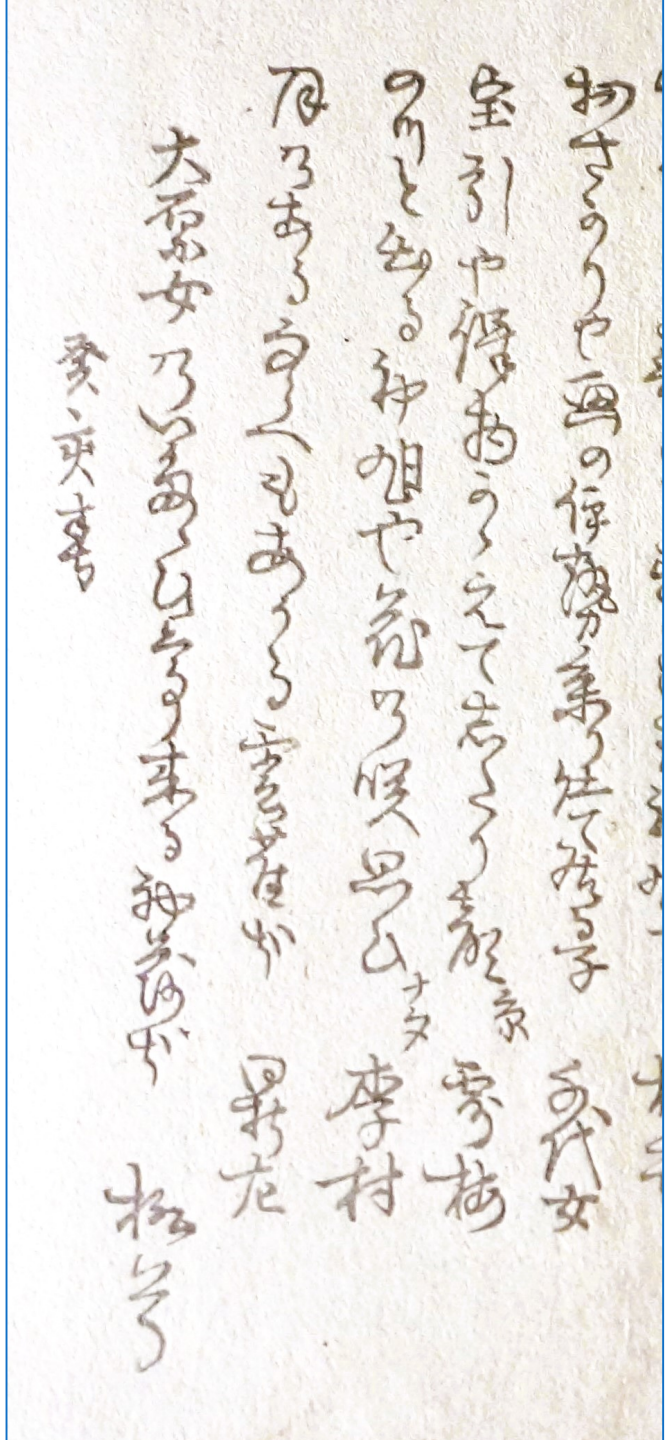
渉（わたり）しお足（お駄賃の意）う

ちはまじめや傀儡師　桃兮

課題



課題



おさがりや画の伊勢参り仕て居る子　千代女

宝引や得物かゝえてしたり顔　京　露梅

のつと出る初旭や花の咲思ひ　ナダ李村

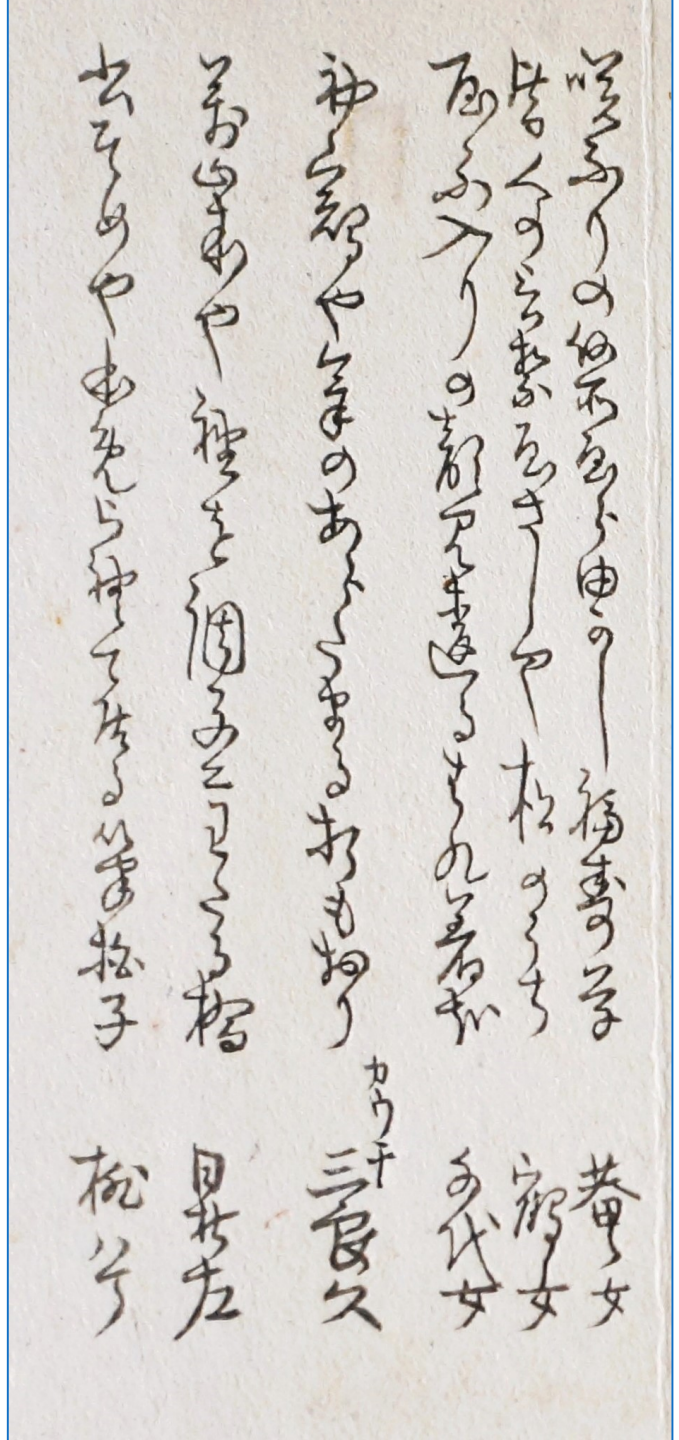
月のあるならべもあがる雲雀哉　鼎左

大原女のいたゞひて来る初荷哉　桃兮

癸亥春

※一八六二年　文久三年春

課題



課題

咲ぶりの何所やらゆかし福寿草　菴女

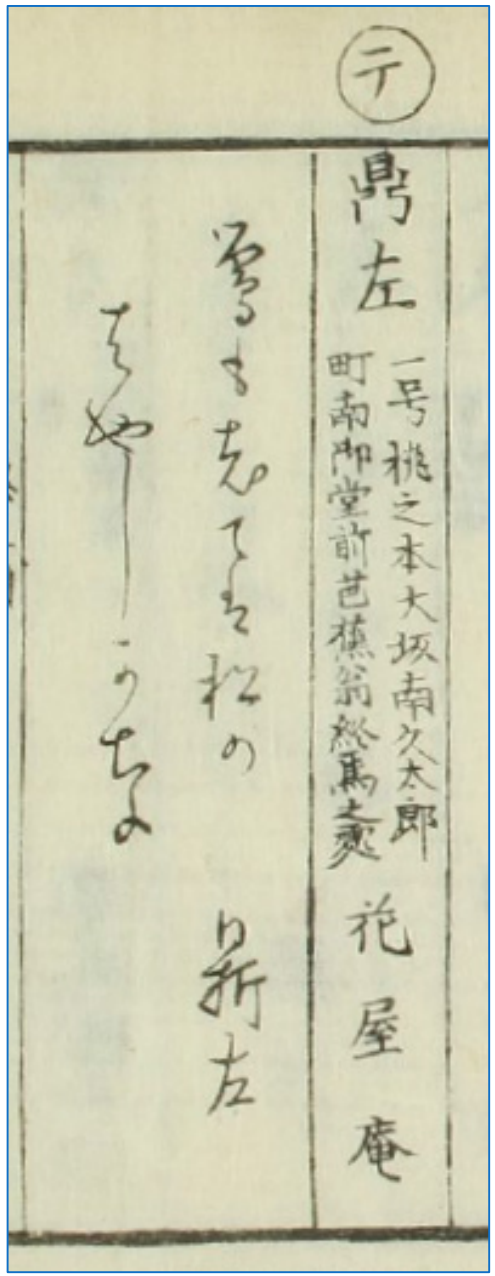
皆人の言葉やさしや松のうち　鶴女

やぶ入りの顔見違るはれ着哉　千代女

初鷹や気のあらたまる折もおり　カウチ三良久

万歳や袖を調子にわたる橋　鼎左

書ぞめやほめられ居る筆拍子　桃兮



俳諧海内人名録

○鼎左（てい さ） 藤井氏。備後の人。大阪の島内畳屋町に住み、俳諧は奇淵門で、鳳棲舎・桃の本、奇淵の後をついで花屋裏、また大黒庵とも号した。井眉・升六と共に奇淵門の三家として大阪に勢力をもち、書画にも堪能であった。天保五年に『荻の声』（奇淵追福）、同六年に『ひとめぐり』（奇淵小祥忌）、同八年に『三めぐり』、十年に『花屋庵月並発句集』、十二年に『佐々浪集』、弘化元年から三年に『芦浪集』、同四年に『有米の実』、嘉永四年に『浪花五百類題集初篇』『増補四季部類大全』、同六年舎用と共編の『海内人名録初篇』、安政二年『浪花五百題二篇』、同六年『拾遺四季部類大全』、文久二年『ふじ日記』など、多くの編著がある。明治二年没した。年六十八。

松風の吹きほそめたる氷柱かな

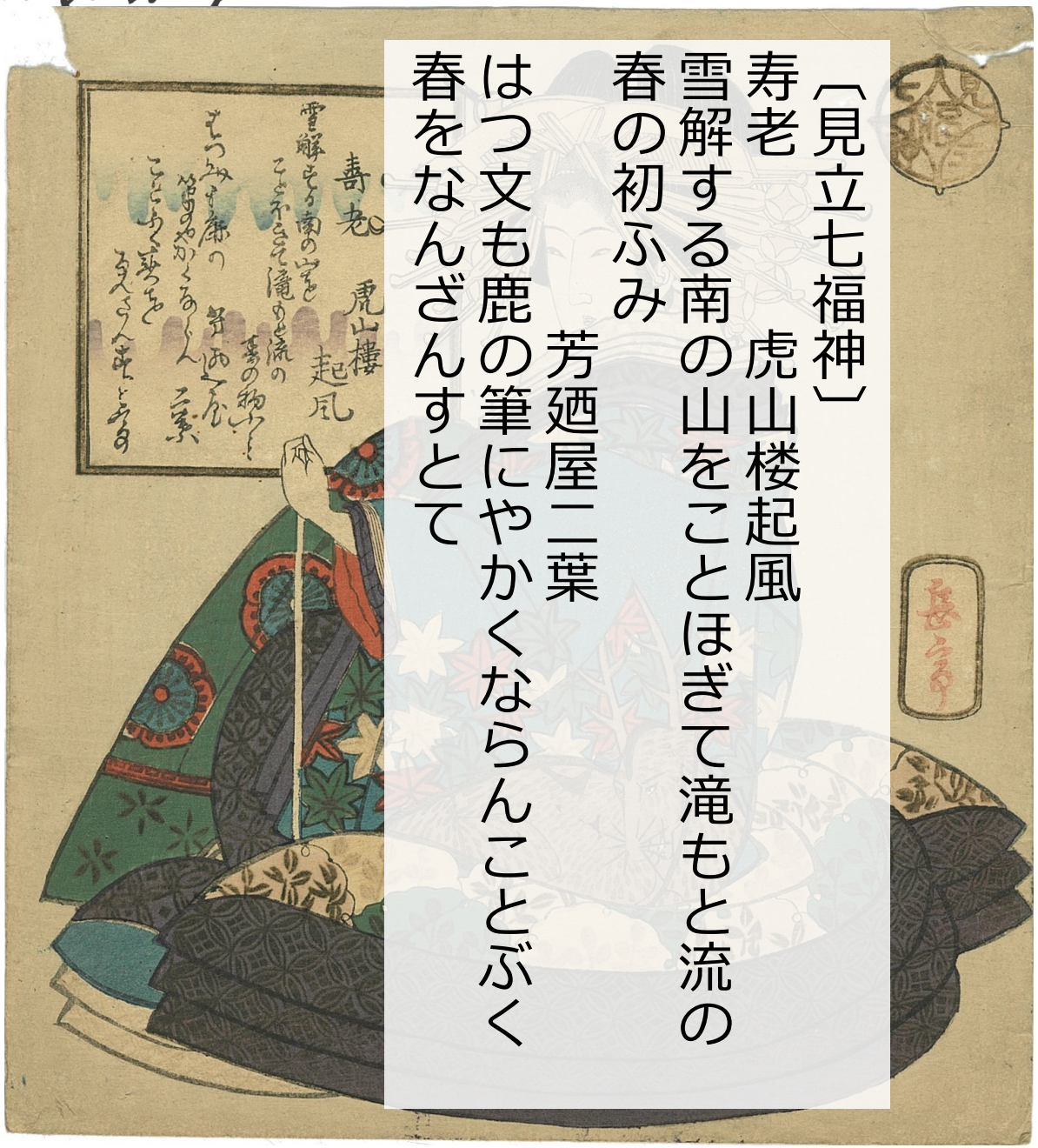
〔参考〕 鼎左雑考、又得『早春』昭一〇の一。

【俳諧海内人名録】（はいかいかいだいじんめいろく） 横本二冊。鼎左・舎用共編。梧

課題

課題

松寿軒永年
にこ／＼と　いけるがごとき　名作の
きどくはうめも　ともに笑へり
〔国直〕



〔見立七福神〕
寿老　虎山楼起風
雪解する南の山をことほぎて滝もと流の
春の初ふみ　芳廼屋二葉
はつ文も鹿の筆にやかくならんことぶく
春をなんざんすとて

〔参考〕
シカゴ美術館

課題

課題

子心の親にみせむととりためる反哺の孝の此あわび貝　一龍軒一々

※反哺の孝(はんぽのこう)…反哺して親の恩に報いるような孝行

※反哺…烏のひなが成長してから、親烏に食物をくわえ与えて養育の恩に報いること。転じて、恩返しをすること。

望月影成
鳴神の雲さへみえぬ七夕に糸のへそまで出して手向つ